

人面付土器
いづみ
 修復中!
 ⑥



レプリカ「いづみ」
 型より現る!

これまでお伝えしてきたように、本物「いづみ」の繊細な修復作業を経て、慎重かつ入念に型を取り、エポキシ樹脂を充填。樹脂がしっかりと硬化するのを待って型から外し、作業開始から7カ月目にして、やっとレプリカ「いづみ」が現れました(写真1・2)。

あらかじめエポキシ樹脂には土器に近い色を付けていますが、やっぱり樹脂は樹脂。土器とはだいぶ質感が違います。本当に土器に見えるようになるのでしょうか・・・?



更に練り出される
 職人の技

質感はともかくとして、私たちが見る限り「いづみ」のレプリカは、細部まで完璧に再現されています。しかし、専門家からすると、このままでは不完全とのこと。有機溶剤や削り粉を吸い込んだりしないよう常にマスクを着け、気の遠くなるような細かい作業を施す必要があるのだそうです。

樹脂製のレプリカには小さな気泡が入っていて、これが表面に現れる

と針の先で突いたような小さな穴になってしまいます。そこで、表面を精査し、これの一つ一つ樹脂で埋めます。

次いで、現物と照らし合わせながら、小さな刃物やリユーター(歯医者さんが使うような小さなドリル)を使って補刻を行い、細部まで忠実に復元していきます。前もってレプリカの表面に補刻した部分に分かりやすいようアクリル絵の具を塗り、例えば「いづみ」の目と口の周囲に施されている、鋭い刃物のような道具でつけたと思われる模様(入墨を表現していると考えられています)は、型取りして複製した物ではどうしてもシャープさに欠けるため、模様の一筋一筋を補刻して、より現物に近づけます(写真3)。この作業を胴部にも施します。



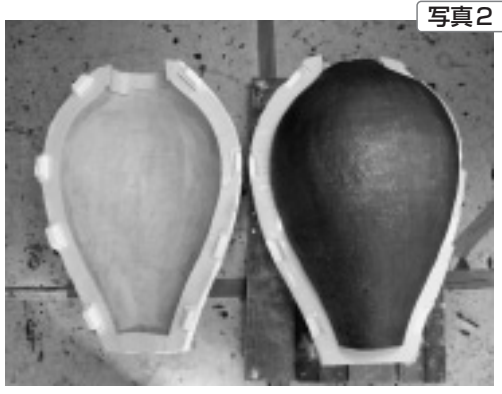
接合そして最終段階の
 彩色へ

細かい仕事が行いやすいように、これまで頭部と胴部を接合せずに作業を進めてきましたが、補刻が完了すれば、双方の断面を整えて接合します。そして、本物の「いづみ」も接合。2つの「いづみ」は並んで置かれ、レプリカには「いづみ」の色を忠実に写し、本物の「いづみ」には樹脂の充填された箇所、彩色が施されることとなります。

次回は最終回。修復を完了した「いづみ」とレプリカの彩色の様子をご報告します。



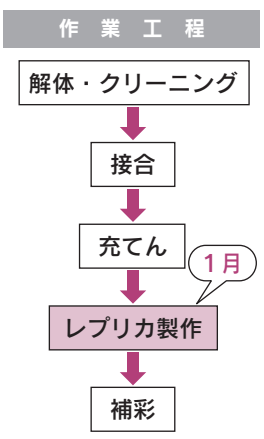
▲頭部脱型



▲胴部脱型



▲レプリカ頭部補刻



※この修復事業には(財)朝日新聞文化財団より助成を受けています

歴史民俗資料館 ☎52-1450

写真提供・取材協力: 府中工房 堀江武史氏